光る未来に全ツッパ。⑩

『ミサキの弁当と、過去の約束』

「これ……なに？」

「……弁当」

松阪駅前のベンチで、ミサキが差し出してきたのは、懐かしい銀色の二段弁当箱だった。

「いや、なんで弁当……？」

「前に言っとったやん。〝手作り弁当とか、もう10年くらい食ってない〟って」

「ああ……そういえば」

――それは、中学のとき。

ミサキが部活をサボって、俺の部室に弁当を持ってきたことがあった。あの時の焼きそばパンと、ぬるいお茶。味は正直そんなに覚えてないけど、あの空気だけは妙に鮮明に残っている。

「まさかまた食えるとはなぁ……」

「文句言わずに食べてよ」

「……ありがたく頂きます」

久しぶりに食った〝普通の白米〟は、コンビニおにぎりよりずっと甘かった。卵焼きは市販の甘いやつ。ウインナーは斜めに切れ目が入ってるやつ。

「うまっ……ミサキ、味のセンスあるわ」

「は？　冷凍食品だし」

「でも、ちゃんと〝弁当〟って感じがする」

「……そりゃ、弁当だし」

ふたりとも、目を合わせない。風がちょっと強くなってきて、ベンチの背もたれに並んだシャツが小さく揺れた。

「動画、見たよ」

「え、どの？」

「〝そろそろ素直になります〟ってやつ」

「……あれか」

「……バカやな」

「いや、そうなんやけどさ」

「……でも、そこがタイチらしいなって」

ミサキが、小さく笑った。怒ってるような、あきれてるような、でも優しい顔だった。

「ほんと、なんで一人でやろうとしたん？」

「うーん……なんか、調子に乗ったっていうか。視聴者がちょっと褒めてくれて、それで舞い上がって……」

「でも、一人じゃ寂しかったやろ？」

「……まあな。あと、編集しながら笑い声ないのって、結構キツいなって」

「それ、私の笑い声やったってこと？」

「……たぶん」

ミサキは、黙って弁当の蓋を閉じた。

その日、俺らはホールに行かなかった。動画も撮らなかった。ただ、駅前のベンチで、昔話をした。

中学のとき、図書室でサボってた話。高校のとき、ふたりで文化祭を途中で抜けてファミレスに行った話。大学の合格発表を一緒にスマホで確認した話。

「でも、ようここまで来たなぁ。スロで」

「なあ。最初は〝カップル風ネタチャンネル〟やったのにな」

「今や、コメント欄で〝結婚しろ〟とか言われてるし」

「それはそれで、めちゃくちゃプレッシャーやな……」

「ほんと、バカやな」

「それ、今週で何回目？」

「8回目くらい？」

「記録更新……！」

ふたりして笑った。

空気が少し、やわらかくなった。

日が暮れて、風が冷たく　なってきたころ。ミサキが小さく言った。

「……また、撮ろか」

「え？」

「スロカップル」

「……ええん？」

「うん。でも条件がある」

「なんでも言うてくれ」

「次は、ちゃんと相談して。何でも」

「……わかった。任せろ。俺、次は絶対〝相談型クズ〟になるから」

「〝自分勝手型クズ〟よりはマシかもね」

その夜、チャンネル名が変わった。

〝スロカップルRe：光る未来に全ツッパ〟

コメント欄が、一斉に動き出した。

【おかえり!!】

【この2人じゃないと無理】

【マジ泣いた】

「なあ、ミサキ」

「ん？」

「また並び打ちしようぜ」

「もちろん」

次号に続く…